

# きつねとあぶらげ

むかしのことです。

ずいぶん雪が降つたときのことです。大府村に住む、たいへん気立てのいい伊助さんが、大高村までお使いに行くことになりました。それは、子どもの生まれたお祝いを親類の家までとどけるためです。重箱には、うまそうなあぶらげやまきずしがいっぱい詰めてありました。

伊助さんが、八ツ屋新田を通りすぎて木之山村との村境の辺りまでくると、どうしたことか、道がいくすじにも分かれていきます。

「おかしいなあ。ここはたしか一本道のはずだつたがなあ。」  
と、不思議に思いましたが、伊助さんは、真つすぐ続いている真ん中の道をどんどん進んでいきました。

「もう木之山に着いてもよさそうなもんじゃが。さては、道をまちがえたかな。」  
といって、今来た道を引き返しました。ところがいくら行つても、さつき歩いた倍も歩いて、元のところにもどることができません。また、引き返しましたが、いくら

行っても木之山には出られません。それで、また引き返しました。

伊助どんは、八つ屋新田と木之山村との間の道を何度も何度も行ったり来たりしました。そのうちに伊助どんは、とうとうつかれはててしまい、道ばたでねむりこんで

しまいました。



「伊助どん、伊助どん。」

と自分の名前を呼ぶ声に、伊助どんはやつと  
のことで目をさました。  
した。そこには、手に  
手にち・よ・う・ち・んをさげ  
た庄屋さんたちが立っ  
ていました。庄屋さん  
たちは、伊助どんの帰  
りがあまりにもおそい  
ので心配して見にきて  
くれたのです。

「伊助どん。だいじょうぶかのう。」

「雪の上の足あとを見ると、おんなじ道を行ったり来たりしていて、そのうちに、くたぶれてしまつたんだな。」

「雪道でねてしまつたら命いのちがにやあぞ。早く見つかつてよかつた、よかつた。」

と、村の人たちがのぞきこんでいます。

「おや、お祝いのおぶらげがのうなつとるぞ。」

「おまえさんは、きつねにだまされたんじゃ。ほれ、あそこに……。」

と、庄屋さんの指差すところを見ると、雪の上いきつねの足あとがくつきりと残っています。そこに、空になつた重箱が落ちていました。あぶらげはすっかり食べられておりました。

共和地区に伝わる話です。この話の舞台は、今の共和町と共西町の境の辺りでしょう。村と村の境は、家々がつながっていない上に、人の行き来も少なくてさびしいところでした。そんなところに、きつねが迷い道をつくり、行人人を化かす話は、各地に伝えられています。庄屋は、殿様のさしずを受けて村を管理する村役人です。